

日中戦争期の中国ムスリム社会における「親日派」ムスリムに関する一考察 ——中国回教総連合会の唐易塵を中心に——

(東京大学大学院) 山崎 典子

〔要旨〕

唐易塵は日中戦争期に日本の対イスラーム政策に協力した「親日派」ムスリムで、雑誌『震宗報（月刊）』の主編者や中国回教総連合会の総務部長を務め、1938年の東京モスク落成記念式典に参加した。同年末から翌年にかけて聖地メッカへの巡礼旅行を行った際には、唐一行が日本の指示を受けて宣伝活動をすることを警戒した中国回教救国協会が、対抗措置としてエジプト留学中のムスリム学生をメッカに派遣した。彼らは唐らを糾弾しながらも、同胞が「対日協力者」として国内で危険な目に遭うことを懸念していた。当時の中国ムスリム社会は、「親日派」と「抗日派」の対立という単純な図式ではとらえきれない、複雑な様相を呈していたのである。

I. はじめに

1. 議論の背景

本稿は、日中戦争期に日本の対イスラーム政策、いわゆる「回教政策」に協力していた中国ムスリム⁽¹⁾——以下「親日派」ムスリムと呼ぶ——の思考や活動、及びそれらに対する中国ムスリム社会の反応を明らかにすることによって、当時のムスリム社会の諸相を考察することを目的とする。

日清・日露戦争で勝利を収め勢力圏拡大に野心を燃やしていた日本は、世界各地に広がるイスラーム・ネットワークの戦略的重要性に注目した。アジア主義者、政治家、軍人たちによって打ち出された「回教政策」は、終戦までさまざまなレベルで実施され、「わが国に於けるイスラーム研究の第一のブーム」(前嶋1980, p.14)を生み出したとされる。また、強国ロシアを打ち負かした日本の国力に寄り添うことで欧米列強に侵食された「イスラーム世界」の復興をめざしていたロシアのタタール人ウラマー、アブデュルレシト・イブラヒム⁽²⁾(1857-1944, 以下イブラヒムと表記)ら汎イスラーム主義者の助力を得て、在日ムスリムの

組織化や「イスラーム世界」への宣伝工作が図られた。後に日本の占領地域となった朝鮮半島や中国、1942年以降は東南アジアでも諜報活動や現地へのムスリムへの懐柔工作が推進されていく⁽³⁾。

「回教政策」の主要対象地域であった中国では、「支那回民の紐帯」とされた華北地方を中心に数々のイスラーム関係機関が設立された。そのなかで「＜華北回教徒工作＞の最大の成果」(片岡1980, p.34)とされたのが、1938年2月7日の「中国回教総連合会」⁽⁴⁾の結成である。そして、この会の総務部長を務めていたのが、日本とつながりをもつ回民の唐易塵であった。

2. 先行研究の整理と問題意識

日本では近年「回教政策」に関する論考が多く出されているが、「回教政策」が同時代の中国ムスリム社会に与えた影響を論じた研究は依然として少ない。一方、松本ますみ氏をはじめとする中国ムスリム研究者による研究⁽⁵⁾は、中国ムスリムの手による漢語史料を駆使して、彼らが抗日運動に身を投じるなかで「中国国民」としてのアイデンティティを深めていく過程を明らかにしてい

る。だが、これらの研究の多くは「愛国主義」的なムスリム側の論理に立脚しているため、「愛国主義」的でないとされたムスリムの「言い分」は十分に検討されていない。また、中国における研究は「親日派」ムスリムを断罪する傾向が強いうえに、彼らを抗日戦争で活躍したムスリムの引き立て役として恣意的に取り上げることも少なくない⁽⁶⁾。しかし、日中戦争期の中国ムスリム社会を多面的に理解するためには、「抗日派」であることを自負するムスリムだけでなく、彼らと深い関わりがあった「親日派」ムスリムにも着目する必要があるだろう。両者の緊張関係を読み解くことによって、ナショナル・アイデンティティが高まりを見せた当時の中国ムスリム社会の諸相を明らかにすることは、近代中国における民族・宗教・国家の関係を把握しその行方を占うことにも寄与するはずである。

本稿ではこのような問題意識にもとづき、唐易塵が創刊し主編者を務めた雑誌『震宗報（月刊）』⁽⁷⁾を主な手がかりとして、「親日派」ムスリムの思考・活動を分析する。また、中国回教総連合会の雑誌『回教月刊』や唐易塵の著作『麦加巡礼記』も用いる。一方、「親日派」ではないムスリムの言説については、当時のムスリム社会で最も影響力があったとされる高級総合雑誌『月華』を利用する。これらの史料には、日本あるいは中国国民党のイデオロギーを代弁する内容が少なからず含まれているため注意を要するが、かえってムスリムの対日観や国家認識がいかなるものであったかを如実に語っていると言えるだろう。

議論の進め方は以下のとおりである。まず、『震宗報（月刊）』の概要と、唐が「回教政策」に参加することになった経緯をまとめる。次に、彼の「親日」的活動とそれに対するムスリム社会の対応を検討する。具体的な「活動」として取り上げるのは、1938年の東京モスク落成記念式典への参加と、同年末から翌39年にかけての聖地メッカ

への巡礼旅行という二つの事例である。「親日派」ムスリムと「親日派」でないムスリムの関係に着目しながら、日中戦争期の中国ムスリム社会の諸相を考察したい。

II. 唐易塵の「親日」的活動

1. 唐易塵と『震宗報（月刊）』

(1) 『震宗報（月刊）』概要

『震宗報（月刊）』の主宰者である唐易塵本人の経歴については、実のところあまり情報がない。だが、北京出身の回民であること、父の唐雨田や4人の兄弟とともに北京で種種の「回教事業」に従事していたことがわかっている。たとえば、唐父子は、北京のムスリム著名人に諸費用を募って北京市宣武区に天橋清真寺（現・北京伊斯蘭経学院、清真寺はモスクのこと）を建設したことで名を馳せたという⁽⁸⁾。また、易塵は「牛羊肉舗の主人」（小村1988, p.485）として、イスラーム的に合法なハラール食品の管理や流通の事業にも携わっていたとされる。こうした「事業」のかたわら、『実報』『新北京報』（のち『新北平報』と改称）などの雑誌でコラムニストとして活躍していた易塵は、1927年には雑誌『震宗報』を創刊し主編者を務めるとともに、自身も多くの記事を執筆していた。管見の限りではこの雑誌を大きく取り上げた先行研究はないようなので、ここでその概要を紹介する。

『震宗報（月刊）』は北京（一時期は北平）のみならず、天津なども含めた華北の回民社会ではある程度影響力を持っていたとされる。誌面を見ると、中国各地に分社があったことやトルコなどに特派員を派遣していたことがわかる。1938年からは東京にも分社をかまえていたが（後述）、42年3月発行の号をもって廃刊となった。記事の内容は、イスラームの教義や歴史に関する講座、中国内外のムスリムに関するニュースを中心として、時事評論、旅行記、小説、エッセイなど多岐にわたる。

前出の『月華』に比べると、通俗的な内容の記事が多い印象を受ける。毎号の分量は約20-45ページで、中東の建築物や自然風景のほか、中国のイスラーム学校やムスリム著名人などの写真がしばしば掲載された⁽⁹⁾。著名なアホン⁽¹⁰⁾による寄稿も少なくなく、中国における「近代四大アホン」に数えられる王静斎や馬松亭の名も見られる。こうしたことから、当時のムスリム社会において、唐がある程度信頼を得ていたことが推察されよう。

なお、同誌は、日中戦争期には唐が総務部長を務めていた中国回教総連合会の活動方針と同じく、「一、中日満三国緊密提携、二、擁護新政府、三、擁護固有宗教、四、打倒万悪共産党」という政治的主張を掲げていた。いわば唐の「親日」的立場を象徴するメディアとして機能していたと言える。

(2)『震宗報（月刊）』の目的

唐易塵が『震宗報（月刊）』を発行していた目的は、創刊十周年記念号の巻頭言に表れている。唐によれば、「回教民族は国家民族のひとつである」が、「ここ数年国難が日増しに深くなっているなかで、民族意識は委縮し振るわない」。そこで、「本報〔引用者注：『震宗報（月刊）』〕はこの種の問題を嚴重に見て、一般の愛読者の面前に国家思想を提唱し、民族の本当の団結を促成することによって、救国して外国の侵犯に抵抗することを一日も早く実現させるのだ」という⁽¹¹⁾。つまり、彼にとってこの雑誌を刊行する目的とは、愛読者——主に華北地域の回民を想定しているものと思われる——である「回教民族」が「国家民族」の一員として救国に貢献するように、彼らの国家意識を高揚させることにあった。

唐の父・雨田も、同様の立場から、回民が「救国」に奮闘することを同頁にて勧めている。そして、「侮教事件⁽¹²⁾が幾度も発生したことによって回民は団結したが、その団結力は十分ではなかった、[だから]文字による宣伝を緩めてはならな

い」とし、「本報とともに、国家民族の復興、回教真理の隆盛、回民の生計の救済などのために努力すること」⁽¹³⁾を読者に求めている。

それでは、唐易塵が回民による「救国」を唱えながらも、当時中国を「侵犯」していた日本に協力したのはなぜか。そこで、彼が日本の「回教政策」に参加することになった経緯をさらにくわしく見ていく。

2. 唐易塵と日本

(1) 日本人ムスリムと「親日派」ムスリム

唐易塵と日本の接近は、おそらく『震宗報』創刊時の1927年頃にまで遡ることができる。田島大輔氏の研究によると、唐は、当時北京において対イスラーム工作を行っていた日本人ムスリムの川村狂堂⁽¹⁴⁾（1877-1942?）と親しくなった。31年に川村が「満洲国」へと活動の場を移すと唐は秘書として同行し、34年に成立した「満洲伊斯蘭協会」では総理事長に選出され、「協会」機関紙である『伊斯蘭旬刊』の編集長となる（田島2009, pp.153-154）。

また、唐は、「満洲国」及び華北・「蒙疆」における「回民工作」に参加していた劉錦標や張徳純⁽¹⁵⁾をはじめとする「親日派」ムスリムとも親交が深かった。劉と張は、1920年代に中国で対イスラーム工作を行っていた山岡光太郎（1880-1959）や佐久間貞次郎⁽¹⁶⁾（1886-1979）といった日本人ムスリムとも交流があったとされる。唐は彼らを通して日本との関係を深めていったのだろう。中国ムスリムを懐柔することによって大陸での「回教政策」を円滑に進めたい日本にとって、華北や東北地域のムスリム社会で信頼される立場にあった唐は、利用価値の高い人物であったに違いない。また、「回教事業」を展開していた唐にとっても、日本によるムスリムへの支援は魅力的に感じられたのだろう。

(2) 唐易塵と中国回教総連合会

「満洲国」を離れ北平に戻った唐易塵は、ムスリムの自助組織をつくることを提唱し、「北京回教会」を同市最大のムスリム街区である牛街に設立することに力を注いだという¹⁷⁾。1937年7月の盧溝橋事件後の10月24日に開かれた同会の設立式には、「支那駐屯軍囑託」の小池定雄や「北京維持会」顧問の西田畊一、天津特務機関長である茂川秀和少佐の姿があった。同会が日本軍部の影響下につくられた組織であることは、疑うべくもない。

その後日本の援助で華北地域に次々とムスリム団体が設立されていくなかで、北京回教会を発展的に解消して翌38年2月7日に成立したのが中国回教総連合会である。その設立式では、茂川秀和が、中国国民党政権が「回教」を「一民族」と認めなかったことは大きな誤りであったとして、日本と回民が「共に一党専政の国民政府を打倒するべきだ」と述べたという¹⁸⁾。同会において総務部長を務めた唐は、以後「親日」的な活動にいつそう深く参与していく。そして、その活動の一つが、1938年5月の日本訪問と東京モスク落成記念式典への参加であった。

Ⅲ. 唐易塵の訪日

1. 東京モスク落成記念式典

(1) 訪日の経緯

1938年は、日本の「回教政策」にとって複数の重大な意味をもつ年であった。第一に、日本宗教史の重要な転機となった宗教団体公認法が国会に提出され（成立・公布は翌39年）、イスラーム公認運動が国内で起こった（重親2005）。第二に、国内外にいくつものイスラーム組織が成立した。前述の中国回教総連合会（2月）のほか、「蒙疆」に「西北回教連合会」¹⁹⁾（12月）、「満洲国」に「満洲回教協会」（「満洲伊斯蘭協会」から改称）、日本には「大日本回教協会」²⁰⁾（9月）が設立された。また、戦後日本のイスラーム・中東研究を牽引する研究者を多数輩出した「回教圏研究所」²¹⁾が発

足したのもこの年である。第三に、この年（ヒジュラ暦1357年）の預言者生誕祭（マウリド）に当たる5月12日には、日本で3番目のモスクとなる東京モスクが代々木大山に完成し²²⁾、その落成記念式典には諸外国のムスリムが招かれた。無論、この式典は日本の「イスラーム世界」に対する宣伝工作の一環として行われたものであった。唐によれば、中国回教総連合会のムスリムたちも招待を受けたという。

東京には今まで清真寺がなかった。この20年来、白ロシアの回教人が、共産党の圧迫を受けたために日本にまで避難し、小学校を建てた²³⁾。これは、昨年から日本の朝野の諸先生の援助を受けていたものである。しかも、日本人の信教者は日に日に多くなっている。そしてついには、正式な清真寺を建設したのであった。その落成は東京回教団に端を発するものであった。[日本は]世界44カ国の回教を祝賀会に参加するように招待した。[これは]世界の回教の感情がつながることに寄与する。当該総会[引用者注：中国回教総連合会のこと]は招待状を受け取ったのち、すぐ式典に出席する正式な代表を推薦によって決めた²⁴⁾。

続く記述によると、その「代表」として選ばれたのは、北平の著名なアホンであった王瑞蘭と前出の劉錦標であった。随員は小池定雄、李宗慶、唐易塵、趙雲陞、陳雄洲で、そのほかに王連鈺という人物がいたという。

(2) 日本への旅

唐らが日本に向けて出発したのは1938年5月1日のことで、全員の出国手続きを取ったのは中国回教総連合会顧問の小池定雄であった。7日に福岡の門司港に到着した一行は、翌8日に訪れた神戸で神戸モスク²⁵⁾に参拝し、その夜東京行きの列車に乗った。

翌9日の朝、東京駅では「加藤〔久〕先生、足羽〔清美〕先生、及び（タタールの回教男女560人）、溥佺殿下及び黄詠霓女士」をはじめとする人々が一行を盛大に出迎えたという。溥佺とは、当時の「満洲国」皇帝愛新覚羅溥儀の父・載灃の弟、載洵の長男のことである。一方、黄詠霓（1906－1986）とは、雪艷琴という名で京劇役者として活躍していた回民（正確には北京の回子営の旗人）女性のことである。彼女との結婚が、溥佺をしてイスラームに入信せしめたきっかけになったと言われている²⁹。「満洲国」皇帝の従弟がムスリムであり、「回教政策」に賛同の意を表明していたことは、日本にとって、「イスラーム世界」に対するかっこうの宣伝材料であったに違いない。

さて、翌10日、新橋第一ホテルで開かれたムスリムの集会に参加した唐たちは、同日午後に宮城を遥拝し、明治神宮と靖国神社を見学した。このとき唐が感極まって「太克逼勒」〔引用者注：タクビール³⁰〕を唱えたという記述は、来日を果たした彼の高揚感で溢れている。晩餐会では、アジア主義者の巨頭であった頭山満や海軍軍人の小笠原長生と交流をもったという。11日にはトルコ、アフガニスタン、エジプトの公使館に赴いたほか、近衛文磨首相官邸を訪問し、廣田弘毅外相をはじめとする閣僚の歓待を受けた。このように破格の待遇を受けた唐は、「日本は回教を歓迎している」という感想を抱いたというから、日本の「回教政策」はある一定の「成果」を収めていたと言えるかもしれない。

(3) 記念式典の様子

式典当日（12日）、唐は溥佺と宗教信仰の話をした後、代々木のモスクに午後1時頃到着した。同モスクの教長である「亜布拉欣」〔引用者注：イブラヒムのこと〕と頭山満を中心として、各国のムスリムが一堂に集い盛大に行われた式典の様子は、『震宗報月刊』にも伝えられている。たとえば、第4巻第7・8期の表紙「東京モスク落成

式典で万歳を歓呼する溥佺殿下」には、日章旗を背景にして「天皇陛下万歳」を叫ぶ溥佺の後ろに、アラブの伝統着をまとったムスリムや背広を着た日本人、そして万歳のポーズをとるイブラヒムの写真が見られる。同号の表紙裏には、式典中の唐易塵や王瑞蘭が小池定雄とともに写っている写真のほか、「日本全国回教協会会長伊トラ欣」〔引用者注：イブラヒムのこと〕と劉錦標先生東京での記念写真（前にあるのは劉氏が伊氏〔引用者注：イブラヒムのこと〕に贈った古瓶）もある。このとき、唐らはイブラヒムと親交を結んだのだろう。式典の翌月に発行された『回教月刊』には、中国西北地域への共産主義勢力の浸透を防ぐことを論じるイブラヒムの文章（漢語訳）が掲載されている³¹。

唐はこの日、おそらく自作のものと思われる詩³²をモスクに贈った。その全文は以下の通りである。イスラームの栄光と、日本にモスクが建てられたことを讃える唐の歓喜が伝わってくる。

東京清真寺落成紀念
開天古教 源起西方
教播東亜 其道維揚
会開三島 寺建扶桑
空前盛業 萬年無疆
北京震宗報總經理唐易塵謹賀

(4) 式典後

式典翌日の13日がイスラームにおいて重要な金曜日であったことから、唐らは「主麻」（ジュマ）の礼拝のために再びモスクを訪れた³³。劉錦標だけはエジプト公使館に招かれ、そこでイエメンの王子や日本の軍人と面会したという。

その後帰国までの約10日間、唐一行は日本各地を見学し、さまざまな人物との親交を深めた。たとえば、14日に招かれた「遊園大会」では林銑十郎や松井石根をはじめとする軍部の大物と交流を

もった。15日午後には満鉄事務所⁸³を訪れ、夜は劉錦標がイタリア大使館の晩餐会に出席したという。そのほかに一行が訪れた場所は、早稲田大学(16日午前)、陸軍学校(17日)、横須賀及び「イスラム文化協会」⁸⁴の茶会(18日)、東京日日新聞(19日)、日光旅行(21・22日)、東大文化学院(23日)など枚挙に暇がない。また、23日夜に開かれた中国ムスリムの送別会には諸外国のムスリムが大勢出席し、唐らとの別れを惜しんだという。一行は翌24日に東京を発ち、28日に北平に戻った。

(5) 帰国後の唐易塵

数週間の日本滞在を終えて帰国した唐易塵は、「北京中央電子台」にて「東京清真寺の落成に関して」という題の講演を行った⁸⁵際、次のように述べた。

今回東京にモスクが成立したことで、世界の回教徒は一堂に会した、[これは]まさしくアジアの一種の平和の表現である、なぜならば回教人は、お互いに「賽倆目」[引用者注：サラーム⁸⁶]と言いさえすれば、その人の国籍は問わない、だから時に言葉が通じなくても、各人の心の中では、皆久しく離れていたが再び集った兄弟のようなのである。

日本で諸外国のムスリムと親交をもった経験は、唐に深い印象を与えたようである。続けて彼は、日本人のイスラームに対する援助を讃えるとともに、東京にはハラール食品を提供する店がないことを指摘する。

日本朝野は我々回教をととても熱心に支援してくれるが、これは我々回教の復興の機会であるだけでなく、日本回教史の開端でもあると言える、しかし東京の飲食はきわめて清潔ではあるものの、回教人が開いたものは一軒もない、最近は多くの人が回教飲食店を開きたいと提案し

ている、遠くない将来に、私はやがて「回教飲食店を開くことを」実現したい。

この記述を見る限りでは、唐は自らの「回教事業」を日本に拡大する意志をもっていたようである。実際に、すでにこのとき、唐は『震宗報月刊』の「東京分社長」として白今愚という名の回民青年を日本に派遣する準備を進めていた。1938年当時25歳であったとされる白は、日本軍人の支援により、中国回教総連合会の第一回留学生として38年8月27日に来日を果たした。その後唐のすすめで帝国大学を受験して合格し、「中国回教徒とイスラーム文化に貢献するため」に政治学の勉強に励みながら、「日回合作」のための宣伝活動に全力を注いだという⁸⁷。また、白はイブラヒムやアジア主義者の若林半とも交流があったとされる。だが、唐が望んでいた東京での「回教飲食店」開店はついぞ果たされることはなかったようである。

2. 中国ムスリム社会の反応

(1) 『月華』の報道

日中戦争期の『月華』には、ムスリムの愛国意識を鼓舞し抗日運動への参加を促す内容の記事⁸⁸や、抗日運動をイスラームの教義と結びつけて説く記事⁸⁹がしばしば掲載されていた。多くのムスリムは、日本の中国侵略に強い義憤を覚えるとともに、ムスリムが「対日協力者」と見なされることを危惧して、中国におけるムスリムの地位を貶めかねない「回教政策」を厳しく批判したのであった。

さて、東京モスク落成記念式典が挙行された1938年5月前後は、中国ムスリムによる全国的な抗日組織である「中国回民救国協会」⁹⁰の設立や活動がさかんに報道された時期で、ムスリム社会では抗日の機運が高まっていた。そのなかで、同年5月25日号の『月華』は、その約2週間前に東京において件の式典が挙行されたことをトップニ

ユースとして報じた。その内容は、「4月30日の中央社香港電」によりながら、「日本は5月13日に東京礼拝寺の落成典礼を挙行しようとして、各回教国を代表の参加者を派遣するように招待したが、全て拒絶された」ことを伝えるものであった⁴⁰⁹。だが、この記述には2点誤りがある。第一に、式典は13日ではなく12日に行われた。第二に、実際には諸外国のムスリムが大勢参加していた。記者自身も認めているとおり、この時点では香港経由の情報しか届いておらず、式典の詳細が不明であったためにこのような誤りが生じたのだろう。中国ムスリムの参加者がいたこともまだ知られていなかったようである。

それから約1カ月半後の『月華』には、「日本の宗教利用政策」と題する記事⁴¹⁰が掲載された。日本は卑劣な手段を用いてムスリムを政治的に利用しており、「決して我々を助けるなどという誠意はない」という厳しい批判の後に、「我々には愛国の義務がある」という力強い意思表示が続く。そして、「最近の香港の某紙」の引用文のなかで、中国回教総連合会のムスリムが式典に参加していたことが初めて指摘された。ただし、この引用文以外には彼らに関する記述はなく、この時点での批判の対象はあくまで日本であった。

〔日本は〕穆罕默德^{マムマ}の1347周年祭〔引用者注：ムハンマドの生誕祭のこと〕の名目で、「反共回教徒大会」を召集した。また、〔そこには〕「中国回教総連合会」の代表である劉錦表〔引用者注：「表」は「標」の誤記〕など4名が参与していた。……このほかにもインド・南洋・中央アジア・アラブなどの回教国家44カ国の代表が会に招かれた。

(2)『震宗報月刊』の経営難

中国回教総連合会のムスリムによる東京モスク落成式典への参加が『月華』で報じられたちょう

どこの頃、すでに日本から戻っていた唐易塵は、震宗報社が深刻な経営難に陥っているという緊急の知らせを『震宗報月刊』に掲載した⁴¹¹。唐は自身の困窮を嘆きながら⁴¹²、出版費用を節約するために今後は合併号という形で発行するよりほかないとしている。また、この少し前の時期に同誌が定価を値上げしていたことも確認される⁴¹³。唐は誌上において『震宗報月刊』の売り上げが低迷した理由を明言していない。だが、全国的に抗日の機運が高まっていた当時の中国において、「親日派」ムスリムが執筆・編集する雑誌を愛読するムスリムは、決して多くはなかつただろう。

ただし、すでに述べたように、この時点では唐らを名指しで糾弾するような記述は『月華』をはじめとする回民メディアにおいて見られない。「親日派」ムスリムに対する批判が噴出する契機となったのは、1938年末から翌39年にかけて唐らが行ったメッカ巡礼旅行であった。

IV. 唐易塵のメッカ巡礼⁴¹⁴

1. メッカ巡礼の経緯

(1) 日本からの提案

ヒジュラ暦の第12月上旬から下旬にかけて行われるメッカ（麦加）巡礼はイスラームの五行の一つで、ムスリムの義務とされる。しかし、中国という遠隔地から、ましてや戦争という非常時にこれを実現できる者はきわめて限られていただろう。そのような状況下で唐易塵らが巡礼を果たし「罕志」⁴¹⁵の尊称を得ることができたのは、日本によるさまざまな形での援助があったからにほかならない。

唐によれば、中華民国27年（1938年）の冬、中国回教総連合会総務部長を務めていたときに、「関係当局」（日本の特務機関だと思われる）から「朝覲」すなわちメッカ巡礼を賛助するという提案があったという（唐2005, pp.3-4）。長らく巡礼を熱望していた唐は、この話を喜んで受け、「高垣

顧問」⁴⁶⁾とともに巡礼団の構成員を協議した。その結果、同会からは劉徳潤と馬良璞の2名が同行者に選ばれた。そのほかに、「蒙疆」(西北回教連合会のことか)がすでに指定した張英と蘇瑞祥という2名のアホンも加わるようになった。

ところで、この巡礼旅行が日本の提案によって実現されたことを批判されるのを恐れたためか、唐は「決していかなる使命もないし、決して日本人参加者を派遣しない」ことを繰り返し強調している。だが、一行が旅路の途中で日本の政府関係者と複数回接触⁴⁷⁾していることから、この旅行が「回教政策」の一環として計画されたものであることが推察されよう。おそらく、唐は保身のために、いかなる「使命」も存在しないかのように振舞っていたのだろう。

しかし、後述するように、当時の中国ムスリムは、唐らの巡礼旅行が明確な「使命」を帯びたものであると考えた。「日本の侵略者に支配された偽『中国回教総連合会』」が「華北回民朝覲団」を結成しメッカで「宣伝活動」を行うことを企図しているとし、警戒したのである⁴⁸⁾。

(2) 旅程

唐らの約3カ月間にわたる巡礼旅行の行程を簡略にまとめると、以下のようになる。

巡礼団のメンバー5名は1938年12月11日に北平に集まり、出境証明書発行の申請手続きをして、19日に北平を発った。まず立ち寄った奉天の文化清真寺では「親日派」ムスリムである張徳純アホンらの歓待を受け、大連(21日)、青島を経由して23日に上海に到着した。上海では、メッカへの行き方や手続き方法を教えてもらうために浙江清真寺に赴き、そこで著名なアホンである哈徳成(1888-1943)の世話になったという。彼らは国際観光局を幾度も訪れて交渉を重ね、1月3日夜にようやくイタリア船に乗ることができた。船は香港、「新加坡」(シンガポール)、「錫蘭島」(セイロン島)、「孟買」(ムンバイ)、さらには紅海沿

岸の港町で当時イタリアの占領地であった「瑪撒哇」(マサワ)を経由した後、エジプトの「蘇彝士」(スエズ)に到着した。慣れない船旅で体調を崩す者も出たが、スエズで小さな船に乗り換え、28日にサウディアラビアの「准徳」(ジェッダ)に入港することができた。初めて足を踏み入れた「回教国家」では何もかもが特別に見えたというから、唐の興奮は相当なものだったはずである。

ジェッダからメッカまでは陸路で約72キロある。一行は中国ムスリムの巡礼団を専門とする案内人⁴⁹⁾に引率されてその日のうちにメッカに向かい、数日間かけてハッジの諸儀礼⁵⁰⁾を終えた。その間、中国西北地域からの巡礼者やメッカに定住している雲南ムスリムのほか、エジプト留学中の中国ムスリム学生たちと度々接触している(後述)。

2月6日にメッカを発った一行はジェッダで数日間過ごした後、その年の春節であった19日に「蘇丹」(スーダン)で停泊した。長旅による疲れからか数人が体調を崩し、マサワで下船(21日)して病院に通うことになる。そして3月1日発の船に乗り、ムンバイ、「哥倫坡」(コロンボ)、シンガポール、「菲律賓」(フィリピン)、香港を経由し、20日に上海に到着した。青島と済南を経て、さらに天津で中国回教総連合会天津区本部による歓待を受けた後、28日夕方に北平に帰着した。その際、音楽隊の演奏と「回教万歳、罕志万歳」の声に迎えられて感極まった唐の口からは、「卧勒孩目独淋倆席」[引用者注：アル＝ハムド・リッラー⁵¹⁾]の句が溢れ出たという。

2. 中国ムスリム社会への衝撃

(1) 『月華』の報道

念願のメッカ巡礼を果たし無事に帰国した唐易塵であったが、その心中は必ずしも晴れやかなものではなかったに違いない。なぜならば、メッカでは中国ムスリム留学生らの厳しい監視下に置か

れていたからである。そのうえ、帰国する1カ月前の1939年2月25日に発行された『月華』には、世界中のムスリムに向けて日本軍の戦争行為と徹底抗戦を訴える声明文「告世界回教教胞書」⁵³のほかに、唐らの巡礼旅行を批判する記事が複数掲載されていたのである。

同号の記事のなかでも、以降計3回にわたって連載された馬堅⁵⁴（1906-1978）の「朝覲日記」⁵⁴は、唐らを名指しで非難するものであった。これは、スンナ派イスラームの最高学府であるエジプトの「艾資哈爾大学」（アズハル大学）に留学していた中国ムスリムのアホンや学生から組織された「中華民国回教朝覲団」⁵⁵に参加し、団長の一人を務めた馬堅による巡礼記である。それによれば、「回民協会〔引用者注：中国回教救国協会のこと〕の唐〔柯三〕、孫〔燕翼〕、達〔浦生〕、馬〔松亭〕四公」が、エジプトにいる中国ムスリム留学生らのメッカ巡礼を賛助するよう政府に求めた。その目的は、「今年日寇が華北の偽組織から選んでメッカ巡礼に派遣した」唐ら5人が「日寇の指示を受け巡礼の名をかたって、実際にはメッカに行き一般の教胞をそそのかし惑わすことに加担して、我々の抗戦に不利な宣伝をする」ことを防ぐことであった。かくして、同会と政府から電報を受け取った（龐1988, pp.19-20）馬堅と龐士謙⁵⁶（1902-1958）を団長とする28名の巡礼団⁵⁷は、1月23日にメッカに向けて出発した。

以下、上記の「朝覲日記」や唐易塵著『麦加巡礼記』の記述を突き合わせながら、メッカにおける唐らの行動や心情を「中華民国回教朝覲団」との関わりのなかでさらにくわしく考察していく。

(2)「中華民国回教朝覲団」による監視

唐易塵たちがジェッダに到着した日（1939年1月28日）、入国手続きをしていると、なんとそこには「龐士謙アホン、納子嘉⁵⁸、海維量〔引用者注：量は諒の誤り〕、馬堅、李鴻青、王士清」といったエジプトに留学中の中国ムスリム学生がい

た。また、新疆から来た「艾沙と馬福良」⁵⁹の姿もあった。彼らのなかには唐の旧友や同郷者、劉徳潤の教え子が含まれていたため、唐は留学生らが迎えに駆けつけてくれたのだと思い、非常に嬉しく感じたという（唐2005, pp.112-116）。だが、馬堅によれば、留学生たちを目の前にした唐たちの「態度は非常に不自然」で、「特に劉仲泉〔引用者注：劉徳潤のこと〕と唐易塵の顔には時折慙愧と落胆の色が見られた」（天僕1939a）。馬の記述が正しければ、唐らは留学生たちが監視に来たことに気がついていたのだろう。

メッカ滞在中、留学生たちは「彼らには我々から半歩離れて歩く機会をもたせない」という強い決意のもと、唐一行を監視し続けた。朝晩の礼拝や巡礼の儀礼の最中も、王宮を見学するときも（2月2日）、電報を打つ際⁶⁰（3日）も、サウディアラビア国王に謁見する際⁶¹にも（4日）、そして食事中でさえも。その監視の厳しさは、「北平の5人はメッカに来てからというもの我々の監視を受け続けている、用を足すにしても何か事に当たるにしても自由を得ることはできないのだ」という馬堅の言葉（天僕1939c）に端的に表われていると言えよう。

たしかに、劉徳潤が言うとおおり、唐らがメッカで留学生たちに会うことがなかったならば、「言葉も通じず⁶²、難儀したに違いない」（唐2005, pp.165-166）。だが、常に見張られているという緊張感からくるストレスは相当なものだったと思われる。なお、留学生たちが特に警戒していたのは、北平の「玉細工商人」で現在は「偽西北学院院長」を務める劉徳潤と、「北平震宗報の編集者」で「清真学校校長」の唐易塵であったという。唐は、馬良璞に対して「我々は今回本当についていない、いつでもどこでも監視している奴がいる、実に不自由だ！」（天僕1939c）と不満を吐露したとされる。

話は前後するが、中国回教救国協会と密に連絡をとりあっていたとされる重慶の国民政府も、唐

一行がメッカに到着する前から監視の目を光らせていたようである。上海出航直後の劉徳潤が、「秘密機関」による追跡に怯える発言をしていた（唐2005, p.51）のも、そのためだろう。また、船上で見知らぬ中国人から「メッカに行くのは何か使命があるからか」という質問を唐突に浴びせられることが数回あったという。その際、彼らは、唐らが「使命」を負ってメッカに行くという「重慶国府の電報」を受け取ったことを明かした（唐2005, pp.62-63, pp.81-82）。このことから、政府が一行の巡礼旅行をいかに危険視していたのかがうかがえる。

(3)「中華民国回教朝覲団」との衝突

唐易塵一行が留学生たちに会ったその日（1月28日）の夜、唐は長年の知己である龐士謙アホンに、今回の巡礼には「使命」があるのではないかと問い詰められたという。そして、以下のような衝撃の事実を打ち明けられた。カイロから来た留学生は唐らを監視するために派遣されたこと。当局から電報を受け取ったとき、なかには唐らを殺してしまえと叫ぶ者もいたこと。しかしながら、多くの者は唐と劉が二、三十年もの間イスラームのために力を尽くしてきたことを知っているの、衝突は避けたいと思っていたこと。これを聞いた唐は、「使命」の存在を否定し、巡礼の目的は「華北の回民がメッカに来る一筋の道を開く」ことであると龐に言い聞かせた（唐2005, pp.133-134）。だが、このとき、彼が唐の言葉を信じたとは考えにくい。なぜならば、前述のとおり、留学生たちはその後も唐一行に対する監視を緩めることはなかったからである。同時に、彼らは、諸外国から来た巡礼者やメッカにある商店・飲食店に、日本の戦争行為を告発する内容のビラを配るなどの抗日宣伝活動も積極的に行っていた（天僕1939c）（龐1988, p.138）。

両者の間の險悪な雰囲気が決定的なものとなったのは、2月10日のことである。留学生たちは唐

らに「深い教訓」を与えるために、彼らを昼食に招待した（天僕1939c）。ただならぬ雰囲気を感じてか、唐らは終始落ち着かない様子であったという。留学生のなかには、唐らが「愛国は伊瑪尼」[引用者注：イマーン、イスラームにおける正しい信仰のこと]である」という預言者の言葉に背いていると口角泡を飛ばす者もいた。また、「表向きは中国人の身体をしているが、魂は日本人に売り渡してしまった、つまりいわゆる漢奸である」として彼らを「穆那廢格」[引用者注：ムナーフィク、偽善者・えせ信者のこと]と呼び捨てる者もいたという。敬虔なムスリムを自負する唐らにとっては、イスラームの教義を援用したこうした辛辣な批判は耐えがたいものであったと思われる。

ただし、留学生たちは怒りに我を忘れて罵詈雑言を浴びせたわけではない。同胞が将来「対日協力者」として危険にさらされるおそれがあることを憂慮して、帰国後は「回教政策」に加担しないように勧めているのである。

我々は回教の関係だから、あなた方が誤りを直して生まれ変わり、帰国後は日寇から離れて、可能な範囲内で国家と何らかの仕事をするのができればいいと思っている。さもないと、将来国軍が北平を回復したときに、あなた方はとても危険な状況に置かれてしまうだろう！

馬堅によれば、この言葉を聞いた唐らは自らの誤りを率直に認め、帰国後は日本との関係を断ち切り国家のために奉仕すると誓ったという。だが、実はこのとき唐は「彼らは全く華北の人を理解していない、それどころか華北人を皆漢奸と見なしている」と憤りを感じていた（唐2005, p.189）。表面上は「我々の心にはやましいことなどないのだから、学生たちが何を言おうと我々も気に留めない」（唐2005, p.190）とおおらかに構

えていた唐であったが、内心では留学生たちを不快に思っていたのだろう。

(4) 艾沙と馬福良

2月14日、エジプトに戻る留学生たちがジェッダから船に乗るのを見送った後も、唐らは安堵することはできなかった。なぜならば、新たな監視役が来るという話を前日に耳にしていたからである。

彼ら〔引用者注：留学生たちのこと〕が行ってしまうと我々〔引用者注：唐一行のこと〕を監視する者がいなくなってしまう、彼らはやはり我々が何か宣伝活動をしているのではないかと恐れているのだ、だから彼らはメッカにいる艾沙と馬福良に電話をかけた。

その電話とは、もちろん、唐らの監視を艾沙と馬福良の二人に依頼する内容であった。かくして翌15日の夕方、二人はジェッダにいる唐らのもとに姿を現した。唐は「彼ら二人は我々5人に対して本来は監視の使命がない、しかし彼らはエジプト留学の学生たちが我々を監視しに来ていたと聞いているので、当然我々に注意しているに違いない」と考え、身構えていた（唐2005, pp.191-193）。だが、艾沙が体調を崩したこともあって、結局両者はあまり接触を持つことなく、唐らは18日にジェッダを発ち帰途についたのであった。

3. その後の唐易塵

(1) 反共・「親日」的立場の強化

メッカ巡礼を終えて北平に戻り、『震宗報月刊』の執筆・編集活動を再開させた唐易塵は、反共・「親日」の姿勢をより強めていく。たとえば、帰国直後に発行された号では、「本当の回教人は、俸禄のために信仰を変えたりしない、だから共産党には絶対に本当の回民はいないのだ」と断言している⁶³。その次の号（第5巻3期、1939年7月）からは、目次裏の広告欄の空白部分に「徹底消滅

共産党 才能確保東亜安寧」「建設東亜新秩序 是人民的永遠幸福」、裏表紙の広告欄の空白部分にも「消滅共産、驅除英国」と書かれるようになった。また、同号の巻頭言では、盧溝橋事件の後に国民政府が容共抗日政策をとったことを鋭く批判している。さらに、この頃「北京中央電子台」で行ったとされる講演では、「回教主義与共産主義及回教之反共」と題してムスリムに反共の必要性を強く訴えかけた⁶⁴。

このように唐が反共的姿勢を強めた背景には、メッカ巡礼中に見聞きしたという、ソ連による新疆ムスリムへの圧迫⁶⁵に対する反発があったのかもしれない。だが、それよりも大きな要因として考えられるのは、1937年以降全国一致の抗日態勢を確立するために共産主義勢力と連携していた重慶国民政府——それも、中国回教救国協会の求めに応じて「中華民国回教朝覲団」をメッカに派遣した政府——に対する不信と不満だろう。

やがて、同誌には、日本との和平と反共を説いていた汪精衛を支持する論調の記事⁶⁶や、日本のイスラームに対する施策を好意的にとらえる記事⁶⁷が増えていく。また、廃刊となるまでの約3年間には、唐自身が執筆したとされる反英を主張する社説が数度掲載された⁶⁸。

(2) 『震宗報月刊』の廃刊

現在確認できる『震宗報月刊』の最終号は1942年3月発行の号（第7巻第2・3期、筆者未見）で、その巻頭言のタイトルは「読者に告別の準備をする言葉」であった。

実は、この1942年という年は、日本の「回教政策」の重要な転換点となった年である。前年の太平洋戦争の開戦と日本軍による南方各地の占領により、蘭領インド（現在のインドネシア）や英領マラヤ及び英領ボルネオ（ともに現在のマレーシア）のムスリムを対象にした懐柔工作が本格的に実施されるようになった。つまり、「回教政策」の重点が東南アジアへと移ったことによって、中国

での「回教政策」は急速に勢いを失っていった⁶⁹のである。その影響は、当然、メッカから戻った後も「親日」的な活動を続けていた唐易塵にも及んだはずである。

今となっては、日本の撤退後、彼が中国国内でどのような立場にあったのかということを知るすべはない。だが、中国回教総連合会に参与したムスリムの一部が「日本の敗戦後、『回奸』として断罪されることになった」(新保1998, p.24)ことから推察すると、唐の戦後は決して明るいものとはならなかったに違いない。

V. 「親日派」ムスリムと「抗日派」ムスリム ——おわりにかえて

本稿では、日中戦争期に日本の「回教政策」に深く関与した唐易塵という回民を中心に、「親日派」ムスリムの思考及び活動、そして彼らに対するムスリム社会の反応を検討した。そこから浮かび上がってくるのは、「親日派」ムスリムに敬愛や同情の念を抱きながらも猜疑心や怒りを表出せずにはいらなかった「抗日派」ムスリム、そして同胞からの糾弾を受けながらも日本の「回教政策」に協力することを選んだ「親日派」ムスリム、両者の激しい葛藤である。日中戦争期の中国ムスリム社会は、「親日派」ムスリムと「抗日派」ムスリムの対立という単純な図式ではとらえきれない、複雑な様相を呈していたのである。

ただし、「親日派」ムスリムと一口に言っても、父の代から北京で数々の「回教事業」に取り組み各界のムスリム上層部との交流もあった唐は、貧しさゆえに日本による民生事業に頼らざるをえなかった「蒙疆」のムスリムとは立場が大きく異なる。この点に関しては今後も引き続き検討していかなばなるまい。

さらに検討すべき点を挙げるとするならば、第一に、今回は利用可能な『震宗報(月刊)』のナンバーが限定されていたために、唐易塵その人の人

物像を十分に把握できているとは言い難い点である。国外の図書館で引き続き史料収集を行う必要がある。第二に、「抗日派」ムスリムが「親日派」ムスリムを批判する際、「回奸」ではなく「漢奸」という言葉をしばしば用いていたという事実である。これは、当時の中国ムスリムの民族意識⁷⁰をめぐる問題を考えるうえで示唆的な事例である。

このように多くの課題が残されているものの、今後日中戦争期の中国ムスリム社会を考察する際は、「親日派」ムスリムと「抗日派」ムスリムという二項対立の構図を無批判に受け入れるべきではないことがわかった。この点に留意しなければ、同時期の中国ムスリムのナショナル・アイデンティティをめぐる諸問題を明らかにすることは難しいだろう。

[注]

- (1)中国におけるムスリムの呼称の変遷は複雑で、それ自体が一つの重大な研究テーマである。ここでは、中華人民共和国において回族と呼ばれているムスリムの歴史呼称として回民を用いる。また、中国においてイスラームを信仰する者を中国ムスリムと総称するが、本稿におけるこの表現には、回民だけでなく新疆のテュルク系ムスリムも含意されている。なお、中国ムスリムと一口に言っても、エスニシティや信仰の形態、居住地域、社会的立場など多くの面で差異がある。本来は多様な彼らの社会を「中国ムスリム社会」と一般化して論じることには当然異論があるだろうが、本稿では便宜的にこの語を用いる。
- (2)イブラヒムことAbdürreşid İbrahimは、ロシア・ムスリムの民族運動の指導者として活躍したことも知られる。1909年のユーラシア旅行中に各地のムスリムを観察して書いたオスマン語の旅行記『イスラーム世界と日本におけるイスラームの普及』(原題は '*Âlem-i İslâm ve Japonya*')

da İntisâr-i İslâmiyet) には、日本の「回教政策」を知る上で有用な情報が多く含まれている。日本滞在中の部分に関しては、日本語訳（イブラヒム1991）がある。イブラヒムの来歴や日本での動向は（Türkoğlu1997）、（小松2008）、（坂本2008）を参照。

- (3) アジア・太平洋戦争期の南方占領地における日本の対イスラーム政策については（倉沢2008）がくわしい。
- (4) 日本軍の援助により北平に設立され、中華民国臨時政府の支持と防共を方針に掲げていたムスリムの組織。青年団を設けてムスリム青年の訓練を行っていた。詳細は（新保1998）。
- (5) 最も基本的な文献は、清末民初に沸き起こった中国のイスラーム復興運動と回民の抗日ナショナリズムの連関を論じた（松本2003）及び（Matsumoto2003）である。戦時下における中国ムスリム団体の宗教活動の政治利用を分析した（矢久保2010）は興味深い。ほかに「回民工作」の概要を紹介した（Ando2003）がある。
- (6) たとえば、（白主編2007上、p.702）の記述はその典型例である。
- (7) 本稿では、1927年から31年までの号を『震宗報』、31年の改称後以降42年までの号を『震宗報月刊』と区別して表記する。両者を特に区別しない場合は『震宗報（月刊）』と表記する。今回筆者が利用したのは、北京大学図書館に所蔵されている第3-6巻所収分の号である。未見のナンバーを含むこの雑誌の情報（各号の目次、各記事の執筆者名）については、（雷主編2006、pp.25-86）を参照した。
- (8) 『震宗報月刊』第3巻第1期、1936年11月。
- (9) たとえば、『震宗報（月刊）』の創刊十周年号（第3巻第4期、1937年2月）に掲載された創刊号の写真には、民国期に活躍した回民軍人の馬福祥（1876-1932）の筆による題字「北京震宗月刊」が見られる。回民の教育振興に早くか

ら取り組み、イスラーム新式学校の成達師範学校経営や『月華』創刊に大きな役割を果たした馬は、北京で長年「回教事業」に携わってきた唐と関わりをもっていたのだろう。第3巻第9期の表紙裏には、馬が寧夏省に設立した寧夏雲亭師範学校（雲亭は馬の字）の写真が掲載されている。

- (10) イスラームの宗教指導者を指すペルシア語由来の言葉。漢語では普通、「阿訇」あるいは「阿洪」と表記する。
- (11) 唐易塵「本報十年之前後」『震宗報月刊』第3巻第7期、1937年5月。
- (12) 中国では、イスラームを侮辱する言説や態度がしばしばムスリムの抗議活動をともしなう事件へと発展してきた。1932年に起こった最も有名な「侮教事件」の詳細は、（安藤1996）を参照。
- (13) 唐雨田「十週年紀念」『震宗報月刊』第3巻第7期、1937年5月。
- (14) 黒龍会のメンバーであったとも伝えられる川村については（小村1988）に断片的な記述があるが、近年では保坂修司による興味深い論考（保坂2007）がある。
- (15) 劉及び張の経歴については（田島2009、pp.153-155）を見よ。
- (16) 佐久間については松本ますみ氏によるくわしい研究（松本2009）がある。なお、佐久間は『震宗報月刊』（第3巻第12期、1937年12月）においてイスラームの教義に明るい日本人として高い評価を受けている。
- (17) 唐易塵「我創立回教総会之前後」『震宗報月刊』第4巻第1期、1938年1月。
- (18) 『震宗報月刊』第4巻第3・4期、1938年4月。
- (19) 中国西北地域進出を視野に入れていた日本は、「蒙疆」において積極的に回民の宣撫工作を行った。厚和に本部を置いた西北回教連合会は、軍特務機関の支援を受けて民生や教育など回民向けの多様な事業を展開した団体である（新保

- 1999)。
- (20)国内外で行われていた「回教政策」を統轄していた同会は、雑誌『回教世界』を刊行してイスラーム事情を広く紹介したことでも知られている。初代会長を元首相・陸軍大将の林銑十郎が務め、以後も陸海の将官が会長に選任された。
- (21)当時「国策」の一環として中国のイスラームに大きな関心を寄せていた同研究所には、中国研究者の竹内好や野原四郎も所属していた。
- (22)創建の由来については（小村1988, pp.295-298）、式典の様子は（田澤1998, pp.74-78）の記述及び『大日本回教協会関係写真資料 Ver.1』所収の写真資料を参照。このモスクは老朽化のため、1982年に壊された。現在代々木上原にある「東京ジャーミイ」は、2000年6月にトルコ共和国宗務庁の監督下に建てられたものである。
- (23)この「小学校」及び下記の「東京回教団」については、在日タタール人の歴史に詳しい（松長2009）を参照。
- (24)『震宗報月刊』第4巻第5・6期、1938年6月。
- (25)日本に現存する最古のモスクで、貿易業を営むインド人ムスリムが発起人となって1935年9月に完成。95年の阪神・淡路大震災にも耐えた。
- (26)これらの情報については、満州族研究の阿部由美子氏に詳しくご教示いただいた。なお、溥儀は終戦前後に妻と離別した際、棄教したとされる。
- (27)「アッラーは偉大なり」を意味するAllāh akbar. を唱えること。
- (28)伊トラ欣「談防共与西北問題」『回教月刊』第1巻第3期、1938年6月。なお、イブラヒムは1909年にも、日本のアジア主義者の勧めで北京を訪れ、中国ムスリムに対して日本と中国の連帯を説いた（小松2008, pp.94-96）。彼によると、そのとき寄稿した「東洋人のための東洋」というタイトルの論考は、当時ムスリム社会の主要メディアであった『正宗愛国報』に掲載されたという（Ibrahim1910, pp.542-545）。ただし、該当する同紙の号（第947期、1909年7月25日発行）には、イブラヒムの略歴とその論考の概要が紹介されるにとどまっており、全文は掲載されていない。
- (29)この詩が入った額縁は、戦後も現東京ジャーミイ裏にある「東京回教学校」跡に保管されていた。現物は、日本のタタール人社会に詳しい沼田彩誉子氏が所蔵されている。
- (30)『震宗報月刊』には午後から大日本回教協会の成立式が挙行されたと書かれているが、この日に開かれたのは「回教徒会議」であった（『回教月刊』第1巻2期、1938年5月）。同会の成立は1938年9月19日のことであるから、この記述は唐の誤りである。
- (31)南満洲鉄道株式会社の調査研究機関である満鉄調査部が行っていた中国の経済や社会に関する調査のなかには、中国ムスリムについての研究も含まれていた。また、国家主義者で『回教概論』の著者として知られる大川周明を理事長として、1929年に満鉄から独立した東亜経済調査局（39年に再統合）は、前嶋信次など戦後の学術界で活躍する研究者を輩出したことで知られる。
- (32)1937年5月に設立され、イスラーム諸国との文化交流事業を行っていた団体（小村1988, p.397）。武蔵野銀行創設者である遠藤柳作が理事長を務め、多くの軍人や政治家が参加した。
- (33)『震宗報月刊』第4巻第7・8期、1938年8月。なお、この「電子台」が何を意味するのかは不明である。
- (34)「平安」「救い」などを意味するアラビア語の名詞で、ムスリム同士のあいさつとして日常的に（中国のムスリム社会においても）用いられる。
- (35)ただし、白の年齢や専攻に関しては、西北回教連合会で働いていた小村不二男による以下の記

- 述とは食い違う。「[1939年] 4 月には、北京の中国回教連合会本部派遣の第一回日本留学生として白何某 (31才) [引用者注：白今愚のことと思われる] が、東大文学部大学院の編入試験に合格した」(小村1988, pp.102-103)。
- (36)白壽彝「回教文化運動与抗戦建国」(『月華』第10巻第7期, 1938年6月), 馬全仁「戦火下的同胞起来吧」(『月華』第10巻第8-10期, 1938年7月) など。その他多数。
- (37)熊振宗・穆文富「抗戦中回民应有的工作」(『月華』第10巻第14-16期, 1938年9月), 張玉光「捨希德」(『月華』第11巻第1-3期, 1939年1月), 愚克「抗戦理論与古蘭經訓」(『月華』第11巻第22-27期, 1939年9月) など。いずれの記事も、日本の侵攻から中国を守る戦いをアッラーの意思に適う「神聖抗戦(ジハード)」をとらえ、その犠牲者を「捨希德(シャヒード)」として讃える。この「防衛ジハード」論は、同時代のエジプトをはじめとするイスラーム復興の主流解釈を、中国の現実に合わせて導入、再構成したものであった(松本2003, pp.158-161)。
- (38)この団体は、まず武漢で結成された後、1938年8月に本拠地を重慶に移し「中国回教救国協会」へと改組した。理事長は、広西派軍閥の領袖で国民政府軍事委員会副参謀総長などの要職についていた回民軍人の白崇禧(1893-1966)が務めた。実務は唐柯三ら成達師範学校関係者が担っていた。詳細は(矢久保2010)を見よ。
- (39)無名氏「月華壇論 東京礼拝寺落成典礼感言」(『月華』第10巻第6期, 1938年5月。金徳宝「各回教国拒絶参加東京礼拝寺落成典礼」(同号)もほぼ同じ内容である。
- (40)無名氏「月華壇論 日本的宗教利用政策」(『月華』第10巻第8-10期, 1938年7月)。
- (41)唐易塵「緊急啓事」(『震宗報月刊』第4巻第7・8期, 1938年8月)。
- (42)中国回教総連合会を訪問したことのある津吉孝雄は、戦後の回想のなかで、同会で働く中国ムスリムがかなり薄給だったことを以下のように述べている。「唐易塵総務部長の給料でも、新米の私の半分近いものに過ぎなかったかと思います」(小村1988, p.485)。
- (43)従来は毎号1角だったのが、第4巻第4・3期(1938年4月)から2角に値上げされた。
- (44)この章で主に参照したのは、『震宗報月刊』掲載の簡潔な報告文「特載 麦加朝覲」(第5巻第1期, 1939年5月)と、後に書籍の形で出版された唐易塵著『麦加巡礼記』である。後者はもともと、当時毎週土曜日夕刊に唐主編で回教週刊号を発行していた『新民報』に逐期連載されていたものである。
- (45)アラビア語でメッカ巡礼(ハッジ)を果たした者を意味する「ハーッジュ」(女性「ハーッジャ」)の漢語音訳。「漢志」「哈吉」などと書かれることも多い。
- (46)高垣信造(1898-1977)は著名な柔道家で、その経歴については(小村1988, pp.481-490)を参照。インド独立運動家であるタゴールやラス・ビバリ・ボースの要請を受けてインドで柔道を教えた後、アフガニスタンに招かれ現地の陸軍士官学校で9年間を過ごしたという。「回教政策」の中心的人物であった頭山満とも交流があったらしいが、彼が中国に渡った経緯や目的は不明である。
- (47)日本領事館の「高等特務」であったとされる福原春夫との二度の出会い(唐2005, p.14, p.231), 及び「上海日本領事館」の大石徹という人物との交流(唐2005, pp.231-232)を指す。いずれの邂逅も、偶然にしてはできすぎている。
- (48)(周等2006, pp.382-386)及び(中国伊斯蘭教協会編2006, pp.278-279)。
- (49)メッカには、不慣れな土地にきた遠来の巡礼者のために複雑な儀礼のやり方を指導する人々が

いる。彼らのことをアラビア語では「ムタウウィウ」と呼ぶ。

(50)唐らはまず、メッカに入る前に定められた場所（ミーカート）の一つ「葉蘭木蘭木」（ヤラムラム）で巡礼服（イフラム）に着替えてから、巡礼の意志表示「受戒」を行った（1月27日）。翌28日には巡礼の最中に唱える祈りの章句タルビヤを唱えながらメッカに入り、聖モスク内にある「克爾拜」（カーバ）を左回りに7周する「套瓦夫」（タワーフ）儀礼や、「色法」（サファー）と「買勒臥」（マルワ）の二つの小丘の間を7回行き来するサアイ儀礼を行った。その後、メッカ郊外の「彌拿」（ミナー）の谷で過ごし（29日）、「阿勒発」（アラファ）山でウクーフ儀礼を実践し「母子代里凡」（ムズダリファ）で一晩を過ごした（30日）。翌朝はミナーで石投げの儀礼などを行ってから羊を供儀し（31日）、その後数日間石投げやタワーフ儀礼をした後、メッカを発った（2月6日）。預言者廟のある「麦地那」（マディーナ）へは、「聖墓に参詣するのは天命ではない」という理由から立ち寄らなかった。

(51)アラビア語で「アッラーに賛えあれ」を意味する *Al-ḥamd li-Allāh* の漢語音訳。

(52)これは、もともとは1938年1月に中東を訪れた王曾善や馬天英を中心とする「中国回教近東訪問団」がアラビア語で起草したもので、中東各地の主要新聞にも転載されたという。

(53)雲南出身の回民で、字は子実。1931年からエジプトに留学。戦後は北京大学教授や中国伊斯蘭協会常務委員会委員を務める。彼が訳出した『古蘭経』は、今日の中国でも最も広く読まれているクルアーン訳書の一つとされる。

(54)天僕「朝覲日記」『月華』第11卷4-6期（1939年2月）、第7-9期（同年3月）、第10-15期（同年5月）。以下引用の際は（天僕1939a）（天僕1939b）（天僕1939c）と表記。

(55)日中戦争期、一部の中国ムスリムは中東や南アジア、東南アジアのイスラーム諸国を訪れ、抗日を唱える演説やビラ配りといった宣伝活動を行った。こうした「愛国外交抗日活動」の詳細は（周等2006, pp.369-399）。同著では、唐易塵らに関しても『回民言論』『中国回教救国協会会報』の記述を参照して言及している（pp.382-386）。

(56)河南出身の回民で、著名なアホン。1930年から8年間成達師範学校でアラビア語などを教えた後、38年よりエジプトのアズハル大学に留学、42年からは同大学にて中国文化講座をもった。帰国後は北平師範大学教授、中国伊斯蘭協会常務委員会委員などを務めた。

(57)28名の名前は、（龐1988, p.116）の集合写真で確認することができる。

(58)雲南出身の回民で、アラブ史の専門家の納忠（1910-2008）のこと。子嘉は字。1931年にアズハル大学に留学、優秀な成績を収め36年には同大学から最高学位である「学者証書」を授与された。帰国後は雲南大学や北京外国語学院で教えた。

(59)前者は、代表的なウイグル人民族主義者のアルプテキン *Alptekin*（1901-1995）のこと。1932年に南京の国民党中央に接近した後、46年の新疆省連合政府成立に際しては国民党側の指導者として新政府に参加したが、49年の人民解放軍の進駐に伴いトルコに亡命した。後者は新疆出身の回民。二人は1938年10月から、中国回教救国協会の命を受けて中東及び南アジア諸国に赴き、抗日宣伝活動を行っていたとされる（周等2006, pp.381-382）。

(60)このとき、留学生の一人である海維諒が英文による電報作成を手伝ったのは、親切心からというよりは、唐らが打つ電報の中身を事前に確認しておきたかったからだろう。その内容とは、
“Sheepei Public School Newkai Peiping China. Haj

Finished returning immediately. Liu.”で、北平の牛街にある「西北学校」（日本軍が指導していたムスリム学校）に向けて巡礼の完遂を報告するものであった（唐2005, p.166）。このことから、唐一行の巡礼旅行が日本の指示を受けていたことが推察される。

(61) このとき唐らが国王に献上した贈り物について、馬堅は「おそらく日本人が彼らに国王に贈るように持たせたのだろう」と考えていた（天僕1939c）。なお、張英は、国王に贈る絹織物の中にアラビア語の手紙を挟んでおいたのだという（唐2005, p.199）。この手紙の内容は不明であるが、唐一行の巡礼旅行が「使命」を帯びたものだったとすれば、おそらく日本の「回教政策」に対する理解と支援を国王に求める内容であったと考えられる。

(62) 唐一行のうち、馬良璞と張英と蘇瑞祥はある程度アラビア語を話すことができた。馬は日本語を少し話すこともできた。

(63) 唐易塵「小言 回民的信仰和反共」『震宗報月刊』第5巻第2期, 1939年6月。

(64) 「講演 唐易塵在北京中央電台之講演 回教主義与共產主義及回教之反共」『震宗報月刊』第5巻第5期, 1939年9月。

(65) 唐がメッカで聞いた話によれば、新疆の実権を握っていた盛世才（1892-1970）が「回族人民に対して侵害を加え、最近では赤俄が新疆に入ってきて、盛と赤俄が手を組んだ」。そして、盛と対立していた回民軍人の馬仲英（1912?-37）がソ連の捕虜となり、南アジアを經由してメッカにまで逃れてきた彼の部下は3万人にのぼったという（唐2005, pp.131-132, p.240）。同様の話は（龐1988, pp.132-133）にも見られ、新疆のムスリムに対する彼らの同情心がうかがえる。なお、当時の新疆情勢についてはForbes（1986）を参照。

(66) 唐震宇「回民对汪之和平主張与希望於新中央政

権者」（第5巻第4期, 1939年8月）, 「時間 汪精衛和平主張 回民一致擁護」（同上）など。

(67) 日本で宗教団体法が衆議院を通過し、閣僚がイスラームを尊重すると発言したことを伝える記事（第5巻第2期, 1939年6月）や、日本軍の働きに感謝して中国回教総連合会の河南地区本部委員である程国亮という人物が献金したことを伝える記事（第5巻第5期, 同年9月）など、他多数。

(68) 唐易塵「埃及依附英国之誤謬」（第6巻第3期, 1940年9月）, 唐易塵「英蘇侵犯伊朗与回民之自決」（第6巻第12期, 1941年6月）など。いずれも筆者未見。また、（唐2005）にも「巴力斯坦（パレスチナ）」問題をめぐるイギリスへの批判が随所に見られる。

(69) ただし、当時イスラームを研究していた野原四郎の戦後の回想によれば、太平洋戦争開戦より前の1939年から40年頃には大陸での「回教政策」はすでに挫折していたという（野原1966, p.228）。「蒙疆」地域における「回教政策」破綻の原因については、（坂本2008, pp.67-71）が参考になる。

(70) 1930年代の大都市のムスリム社会において青年ムスリム知識人たちが提唱した、中国ムスリムの総体を単一・固有の「回族」=「回教民族」と見なす「回教民族」説については（安藤2008）を参照。『震宗報（月刊）』を見る限りでは、唐易塵も基本的には「回教民族」説を支持していたようである。

[参考文献]

1. 一次文献

成達師範学校編『月華』（初版1929-45年, 再版, 寧夏少数民族古籍整理出版規画領導小組辦公室整理, 全9冊, 寧夏人民出版社, 2010年）。

龐士謙（1988）『埃及九年』（初版1951年, 北京月華文化服務社出版, 再版, 中国伊斯蘭教協會出

版)。
 唐易塵 (2005)『麦加巡礼記』(初版1943年, 震宗報社, 再版,『清真大典』第20冊, 黄山書社)。
 『震宗報 (月刊)』(1927-42年, 震宗報社)。
 『正宗愛国報』(初版1908-1913年, 再版, 中華全国図書館文献縮微中心編, 1987年)。
 中国回教総連合会編『回教月刊』(1938年-)。
 Abdürreşid İbrahim. (1910) '*Âlem-i İslâm ve Japonya' da İntisâr-i İslâmiyet.*: İstanbul.

2. 二次文献

アブデュルレシト・イブラヒム著, 小松香織・小松久男訳 (1991)『ジャポonya』第三書館。
 安藤潤一郎 (1996)『『回族』アイデンティティと中国國家：一九三二年における『教案』の事例から』『史学雑誌』第105編12号。
 —— (2009)「中華民国期における『中国イスラーム新文化運動』の思想と構造」(堀池信夫他著『アジア遊学129：中国のイスラーム思想と文化』勉誠出版)。
 大塚和夫他編 (2002)『岩波イスラーム辞典』岩波書店。
 片岡一忠 (1980)「日本における中国イスラーム研究小史」『大阪教育大学紀要 (Ⅱ) 社会科学・生活科学』第29巻1号。
 倉沢愛子 (2008)「『大東亜』戦争期の対イスラーム政策」(坂本勉編『日中戦争とイスラーム：満蒙・アジア地域における統治・懐柔政策』慶応義塾大学出版会)。
 小松久男他編 (2005)『中央ユーラシアを知る事典』平凡社。
 小松久男 (2008)『イブラヒム, 日本への旅：ロシア・オスマン帝国・日本』刀水書房。
 小村不二男 (1988)『日本イスラーム史』日本イスラーム友好連盟。
 坂本勉 (2008)「アブデュルレシト・イブラヒムの再来日と蒙疆政権下のイスラーム政策」(坂本勉編『日中戦争とイスラーム：満蒙・アジア

地域における統治・懐柔政策』慶応義塾大学出版会)。
 重親知左子 (2005)「宗教団体法をめぐる回教公認問題の背景」『大阪大学言語文化学』第14号。
 新保敦子 (1998)「日中戦争時期における日本と中国イスラーム教徒：中国回教総聯合会を中心として」『アジア教育史研究』第7号。
 —— (1999)「西北回教聯合会におけるイスラーム工作と教育」『早稲田大学教育学部学術研究：教育・社会教育・体育学編』第48号。
 田澤拓也 (1998)『ムスリム・ニッポン』小学館。
 田島大輔 (2009)「『満洲国』のムスリム」(堀池信夫他著『アジア遊学129：中国のイスラーム思想と文化』勉誠出版)。
 日本学術振興会科学研究費基盤研究 (2006)「日本・イスラーム関係のデータベース構築」早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室編『大日本回教協会関係写真資料Ver.1』(CD-ROM)。
 野原四郎 (1966)『アジアの歴史と思想』弘文堂。
 保坂修司 (2007)「中東情勢分析 文化紹介 アラビアの日本人——日本のムジャーヒディーン」『中東協力センターニュース』2007年12月・2008年1月号。
 前嶋信次 (1980)「イスラーム研究ブームことはじめ——先次大戦末までの思い出」『日本のアラブ——思い出の記 (その1)』日本アラブ関係国際共同研究国内委員会事務局。
 松長昭 (2009)『在日タタール人：歴史に翻弄されたイスラーム教徒たち』東洋書店。
 松本ますみ (2003)「中国のイスラーム新文化運動：ムスリム・マイノリティの生き残り戦略」(小杉泰・小松久男編『現代イスラーム思想と政治運動』東京大学出版会)。
 —— (2009)「佐久間貞次郎の対中国イスラーム工作と上海ムスリム：あるアジア主義者をめぐる考察」『上智アジア学』第27号。

矢久保典良 (2010) 「日中戦争期の重慶における中国ムスリム団体の宗教活動とその特徴——中国回教救国協会とその重慶市分会を中心にして——」『史学』第79巻第1・2号。

白寿彝主編 (2007) 『回回民族史 (上)』中華書局。

雷曉靜主編 (2006) 『回族近現代報刊目錄提要 (上冊)』寧夏人民出版社。

彭年 (1987) 「日寇控制下的偽“回聯”」『日偽統治下的北平』北京出版社。

周瑞海等著 (2006) 『中国回族抗日救亡史稿』社会科学文献出版社。

中国伊斯蘭百科全書編輯委員会編 (2007) 『中国伊斯蘭百科全書』四川辞書出版社。

中国伊斯蘭教協會編 (2006) 『穆斯林愛国主義教程 (試用本)』宗教文化出版社。

Ando, Junichiro (2003) “Japan’ s ‘Hui-Muslim Campaigns’ in China from the 1910’ s to 1945” 『日本中東学会年報』 vol.18, no.2.

Andrew D. W. Forbes (1986) *Warlords and Muslims in Chinese Central Asia: a political history of Republican Shinkiang 1911-1949*, Cambridge University Press.

İsmail Türkoğlu (1997) *Sibiryalı Meşhur Seyyah Abdürreşid İbrahim*, Türkiye Diyanet Vakfı.

Matsumoto, Masumi (2003) “Sino-Muslims’ Identity and Thoughts during the Anti-Japanese War” 『日本中東学会年報』 vol.18, no.2.